

## 続 香筵とコミュニケーション

### —香道具と組香の四季—

● 上 村 代志子

黒漆の上に梨地が淡く蒔かれ、若松・竹・流水が金銀高蒔絵と研出蒔絵で表わされ、梅花や椿の花は螺鈿や金具が彩る。この様な大家の婚礼道具の十種香箱をはじめとする豪華な道具類は眺めているだけでも楽しい。

日本の美しい花鳥風月で装飾された香道具から、普段の稽古で使う簡素な道具類は、使う人間だけでなく、居合わせた人々にさまざまに影響し、道具と人とのコミュニケーションが行われている。

道具だけでなく、人間が作り出した「物」は、社会ばかりか一人ひとりの過去の思い出や現在の体験、将来の夢にさえも作用し、その人の環境を構成すると云われている。

四季という自然現象や言語さえも広義の「モノ」として考えられ、記号論を借りれば、自然や言語や道具の記号の上に香筵という座が成立していると考えられる。今回は、これらモノとコミュニケーションの視点から述べる。

#### (1) 香道具

伝統工芸の漆工、木工、金工、紙工、陶芸、織、染、描画などの様々な職人の技で仕上げられた道具が目目を引くが、仏教と共に大陸から伝来した当時の香具も現存している。

鎌倉、室町時代には中国から美術工芸品が大量に舶載され、唐物と称されて室内に飾ることが盛んになったが、この中にも香道具があり、彫漆や螺鈿には優作が多いという。

近世になると香道具は組香の発展や茶の湯の隆盛に伴い、その種類や形式が複雑多彩となった。大家の婚礼調度品にも取り入れられることになる。

茶には炉、風炉という様に、設えに季節的な差異があるが、香ではそれ程顕著な差はなく、装飾文様に現れる程度である。香は背景にある文学や有職故実などからくる季節感やイメージの世界が大きいためであろう。

現在、香筵で使用される道具には掛軸や置物、香棚の他、敷物や香炉、香盤、重香合、火道具、香包などが置合わされた乱箱、阿古陀香炉、文台、硯などがあり、一期一会の香筵という舞台を支える役目を各道具が果たす事となる。

#### ① 香帛紗

茶道と同様に塩瀬で作られた物を通常使用しているが、捌き方も同じで、道具を清める役割とされる。

帛紗は香筵の序幕の場面で大切な役割を果たし、扱う香元が捌く所作の内で呼吸を整え、客もそれに呼応して、その空間に引き込まれていく。

重くはなく、しかし、軽くもなく、しなやかで適度な張りを有するこの布は、布にして布に非ずという神秘性を秘めているように感じる。美しく染められた四角の布が目の前で折られたり、たたまれたりして形が変わって行くさまは、手品のように何か別の物が飛び出す訳ではないが、

イリュージョン(illusion)の趣があり面白い。木や金や陶のような硬物で形が変化しない他の道具の中であって、静かに柔らかく優しく舞う光景は、やはり何かを感じさせずにはおかない存在なのかもしれない。

## ②火道具と香炉

灰手前に用いる火道具には火筋(こじ・火箸)や灰押など七種類あり、香元は自分専用の物を使う。熱源となる炭団を香炉に取り、火筋と灰押で山形に灰を調べ、真・行・草と呼ばれる箸目、すじを火筋でつける。香炉内の灰が入っていない上部の空間は世界と称され、羽箒で側面に付着している灰を取り除く事を、世界を掃くと云う。香元の所作は一座注目の的となり、客はこれから繰り広げられる組香の舞台を待ちわびる心躍るひと時であり、香元は神経を集中させ、無心で行わないと美しい箸目にはならない。これで略火合が決まり、香木の香気を如何に引き出せるかという重要な作業となる。

客として参加していても、香元の手元を見ているうちに自分も一緒に道具を持ち、指や手を動かしているような不思議な心地を覚える事がある。

## ③香札

十炷香という組香では、小さな木や竹で作られた札を用いるが、札の表には松、竹、梅、桜、紅葉、牡丹、菖蒲などの花や木の文様が描かれ、同じ文様の札12枚が一組になり小管に入っている。その一管ずつが客に配られ、その文様がその座での客の仮称となり、例えば梅の文様を持った人は「白梅さん」とか「紅梅さん」となり、松なら「若松さん」「赤松さん」「老松さん」と呼ばれる。客自身が自称する場合もあるが、亭主側の執筆者がその客の年齢や印象で、即興で付けたりして同じ札でも呼称が異なる妙味もある。

札の裏には一、二、三、客などの文字が書かれていて、各3枚、計12枚が一組であり、答えを用紙に書くかわりにその札で答え、例えば試香で聞いた一の香りと同じと思った時は一の札を打つ。

古今香という組香の場合は『古今和歌集』の代表的歌人である貫之、業平、小町らが札名となる。札を持った人はその歌人になった様な雅な気分であろう。札の裏には鶯、蛙、花、水、歌の文字が記されているが、これは『古今和歌集』仮名序の冒頭「やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける。……」の一節に因んでいる。

## ④建物(立物)

たて物とは人形や動物、草木などの作り物を云い、色々な形状の盤上でその物を動かす。香を聞きあてると盤上の建物が前に進み、ゴールに早く行き着いた方が勝で、個人戦と団体戦がある。

団体戦の代表的組香に競馬香があり、京都賀茂神社の競馬神事に由来し、雅楽の赤い装束と青い装束を付けた人形各一体が、それぞれ栗毛、青(黒)毛の馬に乗って、盤上を進むのであるが、客は赤方と黒方に分かれ団体戦となる。チームの誰も当たらない時は落馬となり、人形は馬から下りなければならぬ。各チームは歓声をあげたり、ため息をついたり一喜一憂しながら香を聞いていく。組香の殆どは個人戦なので、この様にチームで戦ってみて初めて同志という感覚を持つという人がいる。

遊戯的要素が強い盤物と云われる組香は、東福門院和子の後水尾天皇への入内を契機として、江戸中期にかけて多数創られ流行したが、ゲーム性が強すぎ、本来の精神が失われ、後の香道衰退を招いたと云われている。

以上、特に感慨深く思う道具をあげてみたが、その他、香木の小片を包む香包など小さな物が

いくつかある。香包は小さな和紙を様々に美しく折り上げ、その折の陰影には日本の折る文化、たたむ文化の片鱗を見ることができる。何百年も前に人の手で折られた小さな物にも先人の息吹を感じる。

道具は本来使うために作られているが、それが眼前に存在するだけでも「人と物」とのコミュニケーションが行われる。

「他の物と同様に、それら（人間の作ったもの）は解釈する主体の心的エネルギーを通じて解釈されると同時に、自然物と異なり、作り手である人間の心的エネルギーの投資によって形を与えられた物でもある。」「記号としてみたとき、物は《客体性》という固有の特質を帯びる。つまり、それらは同一個人内では時間を超えて、そして異なる個人からは共通の反応を引き起こす傾向がある。情動や観念などの他の記号に対して、物は独自の具象性と永続性を備えているように見える。もちろん、物のこうした特性はその物理構造にもとづいている。それゆえ、古代人の作った人工物は、彼らの会話や信仰に関する記録がなくても、その文化の観念像を今なお伝えてくれる。」（『THE MEANING OF THINGS』 p17）

## （2）組香の四季とうつろい

日本列島は東アジアの只中に位置する事により、その気候風土に稀有な多重性と多層性を持つようになったと云われる。

東アジアの風土は、大きくは北の落葉広葉樹林帯と南の常緑広葉樹林帯で構成され、北がナラ林帯、南が照葉樹林帯であり、この二つの樹林文化が前後して北から南から日本列島に入って来て、東日本にはナラやブナが、西日本にはシイなどが定着した。「高床の穀倉、鵜飼の習俗、茶・漆・絹・味噌・豆腐を活用したこと、歌垣や鏡餅を大事にしたこと、また十五夜の祝いや山上他界の観念をもったことなどは、何れも東アジア各地の照葉樹林文化に色濃く共通するもの」（『日本という方法』 p16・p17）であり、このような気候風土、文化の中で育まれてきた日本人の感性は、禅やワビ、サビの一面と、これに対する豪華、絢爛の両極端の二面性を持ち、香の世界にもこれを見出す事ができる。

香筵で行われる組香は季節を重要視して選ばれるが、組香のテーマ、構成する名称、典拠となった歌や詩を味わい、コミュニケーションし、イメージを膨らませて香氣に向う。

香筵と季節を考えると、香銘も重要な要素であるが今回は記述しない。ここでは数種の組香を構成する各部の名称や内容などを列挙してみる。[ ] の中は組香の要素となる名称。歌や詩は典拠であったり、奥附に添えられるもの。名目（聞の名目）とは本香で炷かれた複数の香りの組合せにより答え方が別になるものであり、そこにも季節感が色濃く表れる。下附とは正解率の評価であるが、今回は点数ではなく言語で表現される場合だけを記す。なお、[ ] 内のウとは試香では炷かず、本香のみで炷く香りであり、ウが名称を持つ場合はその名称の後に（ウ）と付した。ウは客の文字の冠で、「う」とも「きゃく」とも呼ぶ。

### ①組香の「春」

陰暦の睦月、如月、弥生で、二十四節気では立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨である。

元日の初日の出と共にスタートする新年は夢と希望にあふれ、めでたい名称づくしの祝香が炷かれる。松竹梅は歳寒の三友と云われ、その寒さに耐える強さと凛々しさが、祝香に欠かせず、多くの組香にも登場する。「正月には余寒、残雪、梅、鶯」という言葉もあり、組香の主要なテーマとなる。

初春香 [松・竹・梅 (ウ)]

名目「門の松・かざり竹・蓬莱・くすりこ・はま弓・毬打・こぎのこ・はがため・  
恵方・初とり」

慶賀香 [鶴・亀・松・竹・蓬莱 (ウ)]

詩「嘉辰令月歡無極 萬歳千秋樂未央」

歌「君が代は千代に八千代にさゝれ石の巖となりて苔のむすまで」

梅花香 [一・二・三・ウ]

歌「梅の花それとも見えず久方の天霧る雪のなべてふれゝば」

※同名の組香で名目「早梅・白梅・臘梅・寒梅・匂梅・老梅・夜梅・残梅・梅雪・黄梅・  
夕梅・飛梅・紅梅・散梅・青梅」がある。

鶯香 [松・竹・梅・鶯 (ウ)]

名目「谷の戸・時・古巢」

※同名の組香で、本香の最初に鶯が出ると初音、最後なら梢となるものがある。

七種香 [一・二・三・四・五・六・七]

名目「薺・芹・菁・蕙・繁縷・仏座・御形・七種」

歌「君がため七のあしたの七草に猶つみそへんよろづ代の春」

松の内は関西では十四日であるが、関東では六日までとされ、その日が過ぎると門や部屋から松が外され七草となる。

子日香は正月最初の子の日に、野山にある小松を根引きして庭に移し植え、若菜を摘んで宴を開く子の日の遊びから創られている。その若菜は未だ雪のちらつく野原に出かけて摘む。そんな情景を表したのが若菜香である。

立春香、子日香、七種香、曲水香と歳時記にも示された行事が取り入れられた組香も数多くあり、心豊かな昔の暮らしが偲ばれる。

慶賀香は正月だけでなく長寿の祝いなどにも催される。賀の組香としては他に相生香、住吉香、鶴亀香、萬歳香、蓬莱香、鶯香などがある。

百花咲き乱れ百鳥四方に囀る春たけなわ、南風は暖雨をもたらし、山野を潤す。桜前線が北上する。春雨香や桜に因んだ多数の組香が創られた。桜香、桜狩香、花見香、花軍香、花蝶香、花王香、花柳香、花筏香、都春香、吉野香、嵐山香、残花香、禁裏香などがある。

都春香 [桜・柳・ウ]

歌「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」

名目「桜・柳・客・嵐山・晴間・都の錦・簾外・夕日・朝露」

巢立香、雉子香、黄鸝香、潮干香と、鳥たちも活動をはじめ、太陽もさんさんと降り注いで潮干狩りの候となる。

②組香の「夏」

陰暦の卯月、皐月、水無月で、二十四節気では立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑である。

山野は早緑に包まれ、弥生三月から卯月にかけては一年中で花の大部分が咲き乱れる。卯花香、菖蒲香、杜若香、牡丹香、橘香が楽しい。各地では夏祭りが行われる頃でもある。

時鳥の Teppen Kaketaka のカン高い声を聞いたら田植えという感覚があり、時鳥は鶯と並んで初音と云われる程で、あの一声を人々は待ち焦がれていたに違いない。

時鳥香、郭公香、残月香、新時鳥香、山路香があり、競馬香、蛙香、鶺鴒香、鶺鴒船香など、動物が多く登場する。動物も植物も活発に活動して人々の暮らしと密接に結びついている。

気候は次第に梅雨めいてくる。絹糸のような細々とした雨が降り、暫くすると薄日が差す。そんな日を重ねていつか本格的な梅雨模様となる。そして水無月、炎暑のため水が涸れ尽きる月という意味であるが、青水無月とも云われ、山野の木々は青々と茂る。

全体的に見て組香の数は夏は多くはない。雨がテーマの五月雨香、梅雨香、夕立香、白雨香があるが、雨乞香もあり、湿気が必要な炷香にはこの時期、香日和でない日が多い事が組香の数にも影響していると思われる。

更衣香 [更衣・夏衣・卯花衣・花染衣 (ウ)]

歌「桜色に染めしたもとの惜しければ衣かへうきけふにもあるかな」

※下附「移香・脱捨」のものと「移り香・更衣」がある。

残花香 [夏山・青葉 (ウ)・遅桜 (ウ)]

歌「夏山の緑にまじる遅桜はつ花よりもめづらしきかな」

下附「一枝・散・木間花・新樹・深山桜」

時鳥香 [一・二・三・有明 (ウ)・月 (ウ)]

歌「ほととぎす鳴きつるかたをながむればたゞ有明の月ぞ残れる」

蛙香 [池蛙・田蛙・沼蛙・水・井手蛙 (ウ)]

※井手の蛙が最も美しく啼くと云われる。

「土用半ばにはや秋の風」というように、秋近しともなると夜は涼味が増し、虫の音も聞こえ始める。やがて立秋。

### ③組香の「秋」

陰暦の文月、葉月、長月で、二十四節気では立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降である。

文月七日には七夕香、星合香を催す。七夕の夜には雨が降らないように、雲がかからないように祈るものであるが、人の恋路を邪魔するものや悪天候で、牽牛と織女は逢えない事もある。そんな人間味と共に面白味があり、流儀によっては七夕香は一炷聞く毎に短冊に歌をしたため、床の間に飾り付けた竹に結ぶ。床の間には琴、五色の糸巻、梶の葉に盛った野菜などを掛軸と共に飾り付ける。

伝説をしのび、星に願いをかける。昔ながらの楽しい年中行事に因んだ組香である。

七夕香 [雲・月・扇・糸・竹・牽牛 (ウ)・織女 (ウ)]

星合香 [牽牛・織女・仇星 (ウ) 一・二・三・四・五]

下附「星合・暁雨・宵雨・大雨」

日本の紅葉は世界一美しいと云われている。もみじや楓の赤、ブナやナラの黄など多種の落葉広葉樹が濃く、淡く彩りを変化させる。

月を殊の外愛でたと云われる足利義政の東山文化の時代より香道が整えられたとされるが、月見香、名月香は代表格である。他に望月香、新月香、松月香、雲月香、海月香、対月香などが秋の組香。夏月香、冬月香、雨月香、空月香など多数に上る。

次に小品ながら面白い組香の月見香に就いて述べる。

月見香 [月・ウ]

試香として「月」の香りを聞く。

本香では「月」と「ウ」の香包が各三包用意され、計六包の香包の内、無作為に三包を選んで

炷く。その炷かれた組合せにより決められた聞の名目で答える。

#### 聞の名目

月・月・月の出 十五夜 月三つは満月である  
ウ・月・月の出 十六夜 前日の満月よりも遅くためらうように出てくる  
ウ・月・ウの出 木間月 ウは樹木を表し、月が木の間から見える情景  
ウ・ウ・月の出 有明 ウは空の明るさを表し夜が明けても未だ月が残っている情景  
月・月・ウの出 待宵 有明とは逆に満月になる前の情景  
月・ウ・月の出 水上月 ウは水面を表し、月は空の月と水面に映る月となる  
月・ウ・ウの出 夕月夜 有明と逆だがこのウも天空の明るさを意味する  
ウ・ウ・ウの出 雨夜 ウは雨を意味し、月が全く現れない情景

上記のように「ウ」つまり試香に出ない香りを水、木、天空の明るさにたとえ、これらを月と結び付け、時の経過を暗示したり、様々な月見が楽しめるような趣向となっている。

秋は日増しに夜が長くなり、日一日と寒さも増してゆく。夜明け前や寝付けぬ宵の内に目を覚ますと、庭先の虫の音や砧を打つ音、遠くから鹿の鳴声も時折耳に入ってくる。この様な昔日の秋の音と眠りを主題にした寝覚香も、ゆったりとした風情が偲ばれる組香である。結句に「秋の夕ぐれ」を持つ『新古今和歌集』の三夕の歌に因んだ三夕香は小品ながら趣が好まれ、よく催される。

#### 重陽香 [一・二・初三 (ウ)・後三 (ウ)]

詩「燕知社日辭巢去 菊爲重陽冒雨開」

歌「我宿の菊のしら露けふことに幾代つもりて淵となるらむ」

下附「燕・菊・雨・我宿・白露・幾代・重陽」

#### 寝覚香 [砧・鹿・虫・枕 (ウ)]

名目「寝覚・宵の寝覚・旅の寝覚・暁の寝覚・夢」

#### 初霜香 [初霜・白菊 (ウ)]

歌「心あてに折らばや折らむ初霜のをきまどはせる白菊の花」

「おのづから残るも淋し霜がれのまがきにのこる白菊の花」

※「おのづから残るも淋し霜がれの草葉にまじる白菊の花」もある。

下附「初霜・夜目」

#### ④組香の「冬」

陰暦の神無月、霜月、師走で、二十四節気では立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒である。

秋冬の頃、急に細い雨が短時間降る事があり、やがて寒さは一段と厳しくなる。時雨香、雪見香、寒景香などがある。

従来、水辺の鳥として冬の部に入る千鳥、雪の白に華麗な羽根が映える鴛鴦や都鳥、鶴。冬桜、寒牡丹、寒椿、山茶花、寒菊、水仙、石路の花などの名称が組香を彩る。

#### 小春香 [神無月・晴天・小春 (ウ)]

詩「十月江南天氣好 可憐冬景似春華」

下附「似春・木枯」

#### 寒景香 [雪・氷・雨・霜・寒月 (ウ)]

名目「雪・厚氷・霜・寒月・積雪・垂氷・枯野・白妙・班消・霰・寒夜・夜嵐・初雪・霜柱・霰・陰雲・小舟・池鏡・欺雪・沍寒」

冬至香 [短暑・漏剋・冬至・陰(ウ)・陽(ウ)]

下附「一陽動・北風寒・暖似春・爐火残・一線長・一陽来復・山中無曆」

除夜香 [年・月・日]

名目「新年・睦月・初日」

歌「何事をまつとはなしに明けくれて今年もけふに成りにけるかな」

「月よめば十にあまりてふた月の晦日にあたるこよひなりけり」

「ももしきの大宮人もむれるつゝ、こぞとやけむを明日は語らむ」

下附「除夜・忘年」

### (3) モノから心へ

ある女子高校生は「姫系ロリータ」スタイルのコスプレで街を歩く。中学1年の頃は同級生から「視界に入るな」と罵られ、不登校になっていた。二度の転校後、漸く友達ができ、コスプレで外出するようになり、今まで無視していた中学時代の同級生が話しかけてくるようになった。これはある日の新聞記事である。「モノ」は本人や、他者をも変える影響力を有すると云う一例である。

婆娑羅、伊達とは人目につくように派手に振舞ったり、見栄を張ることであるが、室町時代、婆娑羅大名は唐物の沈香の香りを好み、大量に収集して香道に至る展開に資した。伝統の根源は革新であり、常に変化し、単なる保守ではない。

桜の開花を待ち望む頃、女性達は桜の模様の帯を締め着物を着る。そして実際に桜が咲いた時にはもうその衣装は身に着けない。季節の先取りの楽しみかたである。香筵でも桜香で一足早いお花見をしたり、七夕香や月見香などを早めに行い、答えの出方の天候が当日どうなるか楽しみに待つ。

『古今和歌集』四季の部342首の中、春が134首、夏が34首、秋が145首、冬が29首であるが、今回、伝統的な組香とされている約300を四季と賀と雑とに分けてみたところ、四季の中では春が最多で、次いで秋。夏と冬はかなり少なかった。

「春の花、夏の時鳥、秋の月、冬の雪」が四季を代表する詠題と云われるが、春は桜と梅、夏は卯の花と時鳥、秋は月と雁、冬は雪と時雨に関する組香が多かった。組香名では「月」の文字が入ったものが最も多く、次いで「桜」、「梅」の順となった。

数種の組香名とその組香の構成を並べてみると、それだけで訴えるものがあり、道具に感じるものと同様である。香筵では季節に準じて組香を選び、香を炷くが、逆にそれら組香の構成を見るだけで季節を、四季のうつろいを感じる。香木の幽玄ともいえる香気を媒介として、日本人の感性が文学、季節、生活、夢を取り込み融合して、組香が創り上げられてきた。

人々はモノとのコミュニケーションから回顧ばかりでなく、自己を啓発し、創造へと発展してきたと考える。

### 【参考文献】

- ・鈴鹿周齋傳「香道蘭之園」
- ・尾崎左永子・薫遊舎校注「香道蘭之園」(淡交社、2002年)
- ・杉本文太郎「香道」(1929年)
- ・早川甚三「香道」(八雲書林、1943年)

- ・三條西公正「組香の鑑賞」(理想社、1965年)
- ・長ゆき「香道の作法と組香」(雄山閣、1978年)
- ・小池富雄・永島明子「香道具—典雅と精緻—」(淡交社、2005年)
- ・松岡正剛「日本という方法—おもかげ・うつろいの文化」(日本放送出版協会、2006年)
- ・Mihaly Csikszentmihalyi & Eugene Rochberg-Halton「THE MEANING OF THINGS モノの意味—大切な物の心理学—」市川孝一・川浦康至・訳(誠信書房、2009年)